

伝統修辞学と古典修辞学

—アメリカのインベンションにみられる伝統修辞学の影響—

柳 沢 浩 哉

アメリカの作文教育は1957年の古典修辞学復活を期に大きく発展する。しかし、その後アメリカの作文教育では、復活した古典修辞学をめぐるいくつかの不可解な現象が起きている。その原因を、古典修辞学と伝統修辞学との葛藤という点から考察することが本稿の課題である。

0. はじめに

0. 1. インベンションとは

本稿は、アメリカの高等教育（大学教育）における作文教育を対象としている。アメリカでは大学においても作文指導が行われており、大学において作文理論が盛んに開発されている。中等・初等教育でも、大学教育のために開発された作文理論が使用されており、アメリカの作文理論の最先端は、大学の作文教育に見ることができる。本稿において、今後特に断りのない場合、アメリカの大学での作文教育を対象とするものである。

大学の作文教育において、近年最も盛んに開発されているのはインベンションと呼ばれる分野である。インベンション (invention) は本来、レトリック (西洋修辞学) の一領域であり、構想とも訳される。レトリックは弁論の作成順に、構想・配置・修辞・記憶・所作の五領域に分けられるが、この中の最初の領域がインベンションで、説得に必要な材料と方法を発見する領域である。このインベンションの語は、アメリカの作文教育においても用いられ、取材等を扱う分野の意味で使われている。ただし、アメリカの作文教育とレトリックでは、インベンションの語が多少異なる意味で使用されている。この点に関しては次章で考察したい。

0. 2. 古典修辞学の復活

1957年にシカゴ大学の教授であったリチャード・ウィーバー (Richard M. Weaver)¹⁾が、大学向けの作文教科書『コンポジション』(Composition)を出版する。この教科書はそれまで、殆ど等閑に付されていた古典修辞学 (ギリシャ・ローマの修辞学を、本稿では古典修辞学と呼ぶ。) を作文教育に応用した画期的なものであった。この教科書が応用したのは、古典修辞学の中でもトポス (topos) と呼ばれる部分である。トポスは古典修辞学の中核というべき分野であり、議論の型を分類したものである。(ウィーバーは、『コンポジション』の中で、「類あるいは定義」「原因と結果」「状況」「類似」「比較」「反対」「証言」「権威」の八つのトポスを挙げている。ウィーバーは、これらのトポスをマスター

させることにより、学生の表現を適切にさせることを狙っている。)トポスは、インベンションの一分野であるが、インベンションは古典修辞学の中心領域であり、更に、インベンションの中心的領域がトポスであるため、この教科書の登場は古典修辞学の復活と呼べる事件である。

長い歴史を持つトポスは理論面で充実していたとともに、実践面でも効果を上げた。そのため、トポスはその後、作文教育に携わる教師の間に広く受け入れられ、更に、ウィーバーに追随しトポスを採用した教科書も多数登場²⁾し、古典修辞学は作文教育を独占する勢いであった。古典修辞学を応用した教科書は60年代に最も多く出版されたが、60年代後半になると、古典修辞学に依らない作文教科書の出版も相次ぐようになる。これらは、いずれもインベンションを重視しており、インベンションに新機軸を盛り込んだ教科書であるが、そこでのインベンションには古典修辞学以外の理論・方法が使われている。(本稿では今後、古典修辞学に依らないインベンションを非古典的インベンションと呼ぶ。)このように、60年代に入ると作文理論の研究開発が盛んとなり、特にインベンションの研究には目覚ましいものがあったが、この動きを作り出したのが、他ならぬ『コンポジション』なのである。

『コンポジション』が登場する以前、アメリカの作文教育は長年にわたり低迷を続けていた。当時の作文教育では、主に既成の文法やパラグラフ論の教授が行われており、作文理論が研究対象となるとは考えられておらず、また、インベンションは作文教育において無視に近い扱いを受けていた。当時の作文教師にとって、ウィーバーが作文理論を研究対象としたこと、また、インベンションによる作文教育が大きな効果を上げたことは、大きな衝撃であった。『コンポジション』は、単に古典修辞学を復活させただけではなく、作文理論の開発を促し、また、作文教育において中心的な位置を与えられることになかったインベンションを作文教育の中心に位置付けたという大きな意義を持つのである。

このように、古典修辞学の復活は大きな意義を持つ事件であるが、復活した古典修辞学をめぐる、二つの不可解なできごとがある。ただし、この二つはいずれも本国アメリカでは問題とされていない。

0. 3. 第一の疑問

60年代から70年代前半にかけては、非古典的インベンションが盛んに開発された時期である。当時、多くのインベンション理論を把握することには、大学の教師も苦慮していたようで、大学の作文教師を対象とした雑誌『カレッジ・イングリッシュ』(College English)や『C. C. C.』(College Composition and Communication)等には、この時期、インベンション理論の解説と分類を目的とした論文がかなり掲載されている。1967年に、ジャニス・ローエル(Janice M. Lauer)が、インベンション理論の調査を行っているが、彼女が特徴をまとめたインベンション理論だけで28種に及んでいる。しかし、これらの非古典的インベンションの殆どは、開発の途上であったり(現在も開発の続いているものもある。)、開発に行き詰まったりしている状態で、完成度の高さという点では古典修辞学に遠くおよばないものばかりである。それにもかかわらず、非古典的インベンションは現在でも大学の作文教育においてかなり使用⁴⁾されている。また、次のような事実もあ

る。

1970年に、アメリカで最初の修辞学者の会議であるウイングスプレッド会議が開催されたが、そこでの部会の一つ「第三部会：レトリックにおけるインベンションの本質に関する委員会」では、インベンションの進むべき方向が討議された。そこで採択された声明には、レトリックの対象を言語以外にも拡大すべきこと、インベンションをレトリックの中心に位置付けることなどが述べられているが、その声明の中に次のような一節がある。「たとえば、ブレンストーミングというようなことも大切なレトリックの操作であり、(中略)インベンションの復権は大切な今後の仕事である。」⁵⁾この中に出てくるブレン・ストーミングは、古典修辞学復活以前から存在していた数少ない非古典的インベンションの一つであり、この声明から、非古典的インベンションに対するレトリックの専門家の期待を読み取ることができるのである。

ここまでの内容をまとめると次のようになる。

- ・非古典的インベンションは古典修辞学に対抗し得る完成度の高い理論を提出するに到っていないにもかかわらず、現在でもかなり使用されている。
- ・しかも、非古典的インベンションの多くは古典修辞学が復活した後に開発が始まっている。
- ・レトリックの専門家が非古典的インベンションに期待を寄せている。

ここから次のような疑問が導かれよう。すなわち、完成度の高い古典修辞学があるにもかかわらず、なぜ非古典的インベンションが必要なのか。アメリカにおいてこの点が問題視された形跡はない。

0.4. 第二の疑問

トポス、非古典的インベンションを合わせてアメリカでは、発見の手順(heuristic procedures)と呼んでいる。発見の手順とは「書き手が、複数の視点から題材を分析・検討することを助ける手段」⁷⁾であり、一言に言えば題材の分析である。ただし、トポスと非古典的インベンションの両方を発見の手順に分類することには問題がある。

非古典的インベンションは、質問肢を用いるものと、連想法を用いるものとの二つに分かれる。前者はあらかじめ設定された質問肢に沿って題材を分析するもの、後者は連想によって題材を発展させるものである。このように、非古典的インベンションはいずれも題材を対象としており、題材の収集・分析を目的としている。これを発見の手順として分類することに問題はない。これに対し、トポスの対象は題材ではなく議論法である。また、その目的も題材の分析ではなく効果的な説得にある。トポスの考案者であるアリストテレスはレトリックの目的を次のように述べている。「弁論術とはどんな場合にでも使用可能な説得の手段を発見する能力である」⁸⁾復活したトポスも、その目的はアリストテレスのものと同変わらない。つまり、説得を目的とするトポスが題材の分析手段として分類されていることになるが、説得と題材の分析は性格を異にするもので、トポスを発見の手順として分類することには問題があると言わざるを得ない。しかし、この点もアメリカで問題とされてはいない。

1. インベンションの意味するもの

ウィンターロード (W. Ross Winterowd) は、現在のアメリカの一般的なインベンション理論の形を次のようにまとめ、代表的な理論の比較を行っている。⁹⁾

1. 利用可能な話題を発見する。
2. 話題に関係したアイデア (作文に書く内容) を発見する。
3. 聴衆を決定する。(聴衆に応じた作文を作るため。)
4. 制限を設定する。(社会的タブー等に触れないため。)

ここで示された四つの作業の中の1と2は題材に関するものであり、インベンションの中で題材が重要な位置を占めていることは明らかである。しかし、この中に説得を目的とした作業を見出すことはできない。つまり、一般にインベンションと考えられている中に、説得を目的とするトポスが存在できる場所がないのである。無論、古典修辞学を応用した作文教科書はトポスをインベンションの中で扱っているが、このようなインベンションが、一般には認められていないことになる。

ウィンターロードは一般的なインベンションの形として四つの作業を示しているが、これは説得に関係する部分の除外されたインベンションであり、インベンションとしては非常に範囲の狭い特殊なものである。インベンションの対象としてはこれ以外にも、論理的説得、心理的説得など多くの対象が考えられる。更に、アメリカのインベンション理論でウィンターロードが示した四つを全て網羅しているものは少なく、実際のインベンション理論の範囲はこれ以上に狭い。現在のインベンションの多くが発見の手順と呼ばれていることから分かるように、インベンションは題材に集中し、その殆どが題材の分析を目的としている。つまり、インベンションの多くの選択可能性の中で、題材の分析のみが選択されているのである。このことは、現在のアメリカにおいて、インベンションが非常に狭く理解されており、題材を扱ったもののみがインベンションであると考えられていることを意味している。ここから、第一の疑問「完成度の高い古典修辞学があるにもかかわらず、なぜ非古典的インベンションが必要なのか。」には次のように答えられるであろう。現在のインベンションの中にトポスの存在できる余地がなく、当然、トポスが必要視されることもない。そして、インベンションの中心的テーマである、題材を扱うには新たなインベンションが必要なのである。また、第二の疑問「トポスが、なぜ発見の手順に分類されているのか」についても、同様に答えることができる。現在のインベンションにはトポスを分類すべき場所がないため、現在のインベンションの枠内で最もトポスに近い、発見の手順に分類したのである。

前章での不可解な現象はいずれも、アメリカでの特殊なインベンション理解から生まれたものである。しかし、古典修辞学の復活がアメリカのインベンション研究の発端であることは周知の事実である。とすれば、インベンションは古典修辞学を中心に構成されてしかるべきである。が、古典修辞学を認めないインベンションの形が、一般に定着しているのはなぜか。このようなインベンション理解が生まれた原因の解明を、本稿の最終的な課題とする。本稿では、従来殆ど顧みられることのなかった、古典修辞学復活以前のインベ

ンションに注目し、この中に現在のインベンション理解を形成した伝統を見出していきたい。

2. インベンションの伝統

2. 1. アメリカの作文教育の歴史

古典修辞学の復活以前、アメリカのインベンションには見るべきものがなく、当時のインベンションが問題とされることは殆どない。しかし、この時期のインベンションは何れも題材を対象としており、更に、その伝統は18世紀イギリスにまで遡ることができる。本章では、伝統的なインベンションを概観し、その中で題材の扱いを検討する。

現在のアメリカの作文教育はコンポジションと呼ばれているが、その背景にはレトリックの3世紀に及ぶ伝統がある。現在の作文教育の基礎は、19世紀末の俗流伝統修辞学(Current Traditional Rhetoric)と呼ばれる修辞学によって作られているが、ここで言う「伝統」(Traditional)とは、18世紀イギリスの修辞学のことであり、俗流伝統修辞学とは18世紀イギリスの修辞学を簡略化した修辞学の意味である。(本稿では今後、18世紀イギリスの修辞学を伝統修辞学と呼ぶ。)つまり、アメリカの作文教育は伝統修辞学から出発しているのである。次の表で、伝統修辞学、俗流伝統修辞学、コンポジションの特徴を概観しておきたい。

名 称	特 徴	インベンションの扱い
伝統修辞学	18世紀イギリスの修辞学 説得の技術を研究	やや軽視される。
俗流伝統修辞学	19世紀アメリカの修辞学 正確な文章の作成が目的	研究者により扱いが異なる。
コンポジション	現在の作文理論 文章構成の技術	軽視される。

2. 2. 伝統修辞学

古典修辞学においてインベンションは中心的領域であったが、ペトルス・ラムスの修辞学改革により、中世以降レトリックからインベンションは除外されてしまう。伝統修辞学でも、インベンションは専ら自然科学に属する分野と考えられ、レトリックから除外されていた。伝統修辞学は、近代レトリックが頂点に達した時期と言われるが、そこでの修辞学説はいずれも弁論の内容には立ち入らず、表現や発音を研究対象としていた。

以上は、伝統修辞学のインベンションに対する一般的な見解であり、これは無論誤りではない。しかし、インベンションは当時の修辞学から完全に削除されていたわけではない。伝統修辞学については、エドニー(Clarence W. Edney)がその特徴を整理している¹⁰⁾。彼によれば、伝統修辞学のインベンションでは説得のための理論面・心理面からの方策が検討されているが、ここでは、アリストテレス的な蓋然性からの説得はなりを潜め、事実を簡潔・正確に伝えるための考察が行われている。題材の扱いについてエドニーは「(伝

統修辞学は) 全て、直接的にしる暗示的にしろ、広範な知識と題材についての徹底的な見通しがインベンションの材料であると主張している。」と述べており、伝統修辞学において題材が重視されていることが分かる。伝統修辞学が事実¹¹⁾に立脚した議論しか認めていなかったため、事実を得る方法として題材の分析が重視されたのである。しかし、伝統修辞学に属する修辞学書に、題材に関するこれ以上の言及を見出すことはできない。当時は、題材が修辞学の範囲外と考えられていたのである。伝統修辞学に属する修辞学者キャンベル (George Campbell) は、題材分析の手段はリベラル・アーツにおいて習得すべきことを述べている。つまり、伝統修辞学では題材の分析が、高度な文章作成の準備段階と考えられ、修辞学から除外されていたのである。

2. 3. 俗流伝統修辞学

19世紀の俗流伝統修辞学ではその中心を文章の正確さに置き、文法的正確さ、理解され易い文章構成、文章の種類に応じた文体等が論じられた。ここでの修辞理論は、文章構成のみに的を絞ったものと、既成の修辞学の範囲を網羅したものとに分かれるが、前者ではインベンションがほぼ完全に削除され、後者では伝統修辞学以上にインベンションが重視された。インベンションを削除した修辞学者として、俗流伝統修辞学の中心的人物ヒル (Adams S. Hill) と、パラグラフ論の創始者として有名なペイン (Alexander Bain) などを挙げることができる。その一方で、ヒルと並んで俗流伝統修辞学の代表的研究者であるジェナング (John F. Jenung)¹¹⁾の修辞学書では、インベンションの項目にかなりの紙幅が割かれている。彼は、インベンションを観察・冥想・読書の三つに分け、観察では題材を発見し観察する方法、冥想では自己の思考をまとめる方法、読書では取材を目的とした読書法がそれぞれ述べられている。伝統修辞学において範囲外と考えられていた題材が、ジェナングにおいてはインベンションの中心となっているのである。

伝統修辞学のインベンションは題材の重要性を認めたものの、これを修辞学の範囲外と考えていた。説得に直接関わるもののみが研究対象とされ、その準備段階である題材は修辞学の範囲外と考えられていたのである。しかし、俗流伝統修辞学では正確な文章の作成が目的となり、説得という目的が急速に縮小される。その結果、伝統修辞学の範囲外であった題材が、インベンションの対象として浮上することになる。伝統修辞学で排除されていた題材を、ジェナングのインベンションが、中心的対象として扱っている理由はここにある。

しかし、インベンションの対象としては、心理的説得、論理的説得、聴衆の分析、題材など多くのものが考えられ、正確な文章という初歩的な段階であっても、題材は唯一の対象ではない。その証拠に、ウィーバーは、論理的説得に属するトポスによって文章作成の基本的技術の習得を狙い、かなりの成功を収めている。ここで重要なことは、正確な文章の作成という初歩的な目的に対し、ジェナングが題材を選択した事実である。このことはジェナングが題材を、文章作成の準備段階として理解していたことを意味するが、この認識は伝統修辞学の認識と一致する。つまり、ジェナングの題材という選択は、伝統修辞学の影響下に行われた選択なのである。

2. 4. コンポジション

20世紀に入ると、大学で修辞学の講義が行われなくなり、修辞学の代わりにコンポジションの講義が行われるが、コンポジションは俗流伝統修辞学を更に形式化したもので、基本的には俗流伝統修辞学と同じものと考えてよい。コンポジションの教科書については、ローエルが学位論文の中で行った調査がある。ローエルは1902年から1953年までのコンポジションの教科書16冊を調査しているが、その内の9冊にインベンションに関する記述が見られる。ただし、これらの教科書でも殆どの場合インベンションは軽視されており、インベンションの項目を立てていないものも多い。コンポジションでのインベンションの記述は殆ど全てが題材の取材であり、読書法、カードの取り方、図書館の利用法等が述べられている。これは、ジェナングのインベンションに見られた読書の部分を拡大したものであると考えられる。

コンポジションは、基本的には、ヒル、ペインを受け継いだ文章構成法であるが、インベンションに関してはジェナングの方向が受け継がれ、取材という形で、消極的ながらもインベンションが維持される。これは、取材という特殊なインベンションが20世紀に入り半世紀以上も続いたことを意味する。しかし、当時はインベンションが研究対象とは考えられていなかったため、このようなインベンションが問題視されることはなかった。このような中で次第に、インベンションとは題材を扱うものであるという認識が生まれ、現在のインベンション理解が形成されてきたのである。

3. 古典修辞学と伝統修辞学

なぜ、復活した古典修辞学に正当な地位が与えられていないのか。これが本稿の課題である。これは、インベンションが題材のみを扱うものとして理解されているのはなぜかと読み替えることができた。この特殊なインベンション理解は、半世紀以上にわたるコンポジションの歴史の中で形成されたと考えられるが、更に、俗流伝統修辞学を加えれば、特殊なインベンションは一世紀以上にわたりアメリカで続いていたことになる。しかも、その基本的な考え方は更に、18世紀イギリスにまで遡れるのである。このように長い時間の中で形成された意識は簡単に変化しない。復活した古典修辞学を阻もうとする様々な動きは、この特殊なインベンション理解から生まれたものなのである。

古典修辞学の復活以前、アメリカの作文教育は低迷を続けており、特にインベンションの低迷は著しいものであった。古典修辞学は、インベンション研究を刺激し活性化したという大きな意義を持つが、皮肉にも、伝統的インベンションを刺激し、自らの存在を圧迫するという結果を招いた。しかし、現在、古典修辞学に対する支持は揺るぎないものであり、今後、インベンションの目的が説得という、俗流伝統修辞学以前の目的にまで拡大する可能性も大きい。古典修辞学の復活は伝統的なインベンションに対するアンチ・テーゼであり、現在の矛盾が今後どのように克服されるのか興味の持たれるところである。

注

- 1) ウィーバーの『コンポジション』については香西秀信氏が分析を行っている。香西秀信「ウィーバー (Weaver, R. M.) の作文の教科書『コンポジション』(1957) の国語教育的意義について

- てートポスによる議論文指導の試み一」(『人文科教育研究 10』1983)。また、この論文には古典修辞学復活前後のアメリカの作文教育の状況が詳しく述べられている。
- 2) ハリントンらが、古典修辞学を応用した作文教科書の解説を行っているが、そこで扱われた教科書だけで15冊に上っている。David V. Harrington et. al., “A Critical Survey of Resources for Teaching Rhetorical Invention”, in *College English*, 40 (Feb. 1979)
 - 3) J. M. Lauer, “Invention in Contemporary Rhetoric: Heuristic Proceduers”, The Univ. of Michigan Ed. D.
 - 4) 香西氏が、ローエルが1984年に行ったアンケート調査「貴方の大学では作文にどのインベンションを使用しているか。」を紹介しているが、それによれば、古典修辞学33校、非古典的インベンション48校である。香西秀信「説得的言論の発想形式に関する研究(1) —修辞学の復活—」(『琉球大学教育学部紀要 29』1986)
 - 5) 波多野完治『現代レトリック』(1973 大日本図書) p. 37
 - 6) ブレーン・ストーミング(連想と討議によるインベンション)はフランスで開発されたものでブラウン(Rollo W. Brown)により1915年にアメリカに紹介されている。
 - 7) W. Ross Winterowd, *Rhetoric and Writing*, 1965 p. 13
 - 8) アリストテレス『弁論術』(池田美恵訳『世界文学全集』第16巻、筑摩書房) p. 65
 - 9) Winterowd, *The Contemporary Writer*, 1981, p. 7
 - 10) Clarence W. Edney, “English Sources of Rhetorical Theory in Nineteenth-Century America”, in Carl R. Wallace ed. *History of Speech Education in America*, 1954
 - 11) John F. Genung, *The Working Principles of Rhetoric*, 1902
 - 12) J. M. Lauer: Op. cit, “Invention in Contemporary Rhetoric: Heuristic Proceduers”

(筑波大学博士課程教育学研究科人文科教育)